

■ 書 評



回復するちから―震災という 逆境からのレジリエンス

熊谷一郎 著
星和書店
2016年1月 256頁
本体価格 1,800円＋税

本書は、東日本大震災から半年ほど経過した2011年12月に福島県いわき市で精神科・心療内科診療所を開設した医師による症例報告風の物語により構成されている。9編の物語は、津波で妻と幼い息子を失った男性、自殺企図の電力会社社員、仮設住宅で幻臭を訴える女性、緘黙の少女、ひきこもりの発達障害の男性などそれぞれ特徴がある。

著者は、福島県いわき市に生まれ、関東で医学部を卒業・入局、東京や沖縄の医療施設に勤務した後、いわき市内の総合病院や精神科病院での勤務を経て、診療所を開設した。専攻は、精神病理学・精神分析学・児童思春期精神医学とあるが、幼児から老年期に至るまで幅広い世代への精神科臨床を実践しており、実際評者がいわき市内の総合病院で診療支援に従事した際様々な年代の患者に関して診療情報提供書上のやりとりをした。

いまさら述べるまでもないが、いわき市は、地震・津波に加え原子力発電所事故の複合災害に遭遇した福島県浜通り地域に位置し、原子力発電所事故で避難した人々を全国で最も多く受け入れきた。福島県は震災前から医師数が少なく、平成26年度医師・歯科医師・薬剤師調査では、福島県の医療施設に従事する医師数は人口10万対188.8人で全国第43位、二次医療圏別でみると、県立医大を有する福島市を含む県北医療圏以外は全国平均人口10万対233.6人を大きく下回り、この状況は精神科・心療内科においても同様である。このような地域にあっては、地域で生まれ育ち、医師としても様々な経験を積んだ後、地域に戻った精神科医の存在は、地域で暮らす人たちにとって心強い

ものであろう。しかし、複合災害を経験した人々の抱える苦悩は、多様ではかりしれないものがあり、精神医学的な対応に関しても、型通りの手法で正解を得るというわけにはいかないであろう。

本書の前書きによると、物語に登場する個人については、匿名性が保たれ、全てにおいて現実の状況とは異なるよう再構成されており、実在する患者についての記述ではなく、一人称である「私」にしても著者自身の分身であると同時に、「やや美化されたきらいのある」若手精神科医がイメージされている。これは個人情報保護の観点からも事実ではなく物語である方が望ましいのであろうが、依然著者自身が経験した事実を全て直面化して記載できる段階ではないことも推察される。著者が経験した症例をベースに作られた架空の物語であるためか、読んでいて事実なのか架空の物語なのか錯覚に陥るときがある。著者の丁寧な臨床観察に基づくものであろう非常に写実的で詳細な描写で、状況がイメージしやすいためでもあろう。若手精神科医をイメージしているとあるが著者自身のように様々な臨床経験を経ていなければ無理であろう臨床技法が見え隠れするし、文体も頻繁に変わる。おそらく著者自身が感じた困惑感や不安定感にも通じるものかもしれないと推察される。

本書の物語では、震災後言葉に表せないような喪失体験に遭遇した登場人物は次第にそれぞれの経過で回復にむかう兆しを見せる。しかし、その道程はまだ途中であり、完全な直面化、完全な回復には至っていない。言葉を失い苦悩しながらも回復に向かう人々を描き出そうとしているが、それは著者自身の姿に通じるところがあるのであろう。完全に著者自身が昇華しきれていないのであろうが、結局は言葉に頼るしかなく、回復するちから・レジリエンスを信じることで、福島の苦難の中に差す一筋の希望を垣間見たいのであろう。発災5年近くが経過して出版された背景には、そのような状況でも書かざるを得なかった著者の状況が思いやられる。被災地において真摯に臨床に取り組む精神科医の存在を知ること、あらためて今後の被災地支援のあり方について考えさせられ、次の5年でさらに回復したすがたがみられることを期待している。(高橋秀俊)